

現代紀行文學全集

山岳篇(上)

現代純錫文學全集

山

道
社

現代紀行文学全集

第六卷 山岳篇(上)

川 端 康 成
佐 藤 春 夫 監修
志 賀 直 哉

昭和三十三年七月二十五日印刷
昭和三十三年七月三十日発行

定価四八〇円

発行所東京都千代田区神田一ツ橋二ノ五 秋山修道
印刷者東京都北区神谷町二ノ四五 原田憲次郎
発行所東京都千代田区神田一ツ橋二ノ五 株式会社修道社

電話(30)〇五〇二振替口座(東京)六一六九一
印刷・大澤印刷 製本・山田製本印刷KK

目

次

北海道の夏の山	大島亮吉	三
斜里岳の旅	坂本直行	三
ニセコアンスプリ	深田久弥	三
大雪山紀行	中西悟堂	三
狩勝峠	河東碧梧桐	四
北見峠	伊藤秀五郎	五
三股高原	加納一郎	五
美幌峠より阿寒へ	市河不二子	五
伝説の谷間	更科源藏	七
八甲田高原	深田久弥	八
八幡平	田部重治	八
岩手山	辻村太郎	九
グダリ沼	井伏鱒二	九
仙人峠	沼井鉄太郎	一〇
関山峠	長塚節	一三
鳥海山の春	深田久弥	一七
東北の古典の山	長尾宏也	一三

藏王のふもと	亀井勝一郎	一三一
大東岳と蔵王	岡田喜秋	一三七
サビタのパイプ	木暮理太郎	一四三
会津駒岳、大津岐峠、	川崎隆章	一四七
銀山平日暮開壑		
銀山平より会津の山旅	三田幸夫	一五七
桃源境松枝岐村	中川善之助	一六五
尾 瀬	武田久吉	一八〇
男 体 山	深田久弥	一九五
奥日光交響楽	黒田初子	一九九
藤原の春	川崎精雄	二〇三
霧の彼方	串田孫一	二〇八
上越境の山旅	藤島敏男	二一四
吾妻の溪より六里ガ原へ	若山牧水	二三四
浅間越え	寺田寅彦	二三九
浅間の四季	佐藤春夫	二四三
高原の自然	市河三喜	二四五

荒船と神津牧場付近
 妙義山
 赤城山の四季
 多摩川より秋川へ
 武甲山に登る
 大蔵高丸・大谷ガ丸
 雨の雲取山
 北相の一角
 初旅の大菩薩連嶺
 笛吹川を遡る
 知々夫紀行
 奥秩父の山旅日記
 美しき五月の月に
 三ツ峠の岩場
 八ガ岳
 霧ガ峰と蓼科高原
 七面山所見

大島亮吉		二五〇
河東碧梧桐		二六八
関口泰		二七一
田部重治		二八三
河井醉茗		二八七
尾崎喜八		二九〇
中西悟堂		二九七
武田久吉		三〇五
小暮理太郎		三三八
田部重治		三三六
幸田露伴		三三六
小暮理太郎		三三六
尾崎喜八		三六三
藤木九三		三六六
別所梅之助		三七一
長尾宏也		三七六
井伏鱒二		三八四

新緑の富士の裾野	小島烏水	三六七
富士の冬	榎有恒	三九一
名山富士	松方三郎	三九四
丹沢山脈縦走記	田部重治	四〇〇
日本アルプス縦断記	長谷川如是閑	四〇三
発表誌一覧		四三四

地図

三股・上高地（比較図）	五七	北海道六〇—六一	東北八七	八甲田高原九二	関
山峠一一六	鳥海山一二三	蔵王一四一	男体山・奥日光二〇二	吾妻溪谷—浅間	
二四二	関東・甲信越二七三	多摩川	北相模三二七	秩父三五七	八ヶ岳・蓼科
三八三	日本北アルプス概念図四〇四	針木不動間	脊梁臆測図四二二		

山
岳
篇
(上)

北海道の夏の山

大島 亮吉

然別と音更の水上の谷々と然別沼及び西
ヌブカウシヌブリに就いての紀行断片

一

北海道の山に就いては私はごく限られた一部分のところしか知らない。夏に内地から北海道の山へ行った友達や、または北海道にいて夏や冬や春、秋にいつも山へ行っている友達などから私はよく北海道の夏についての感想をかきとされる。そしてそれは大体に於てあまり夏は面白くないと云うことだ。ヤブが深い。雪が案外すくない。山の形のやさしい火山が多くてゴツゴツしたものが少い。蚊やアブがたくさんいる。と云うのがそのまづ誰れも云うところのあらましである。北海道の夏の山はいいと言う人もあるにはあるがまず少ない。それは雪のいい、針葉樹の雪に蔽われて一層おごそかに見えて、おまけにスキーにはいいスロープの多い北海道の冬の山は夏よりはずっとずっといいと私も思っている。いつ

もおしつけるような冬を過ぎてやってくる春はひと際^{きざ}他よりも北海道でも待たれるだろう。そののびのびとして、いろいろの北でなければ咲かない花などの一斉に咲き、新緑のかぐわしい北海道の春の山も、北の国の一層強く感ぜらるる秋の寂しい気持のよく味える北海道の秋の山も、皆夏と比べては好いには相違ないと思っている。けれども私は夏しか知らない。不幸にして私はまだ夏以外の季節に北海道の山へゆく機会を是迄持たなかった。そしてその割合につまらないと云われている北海道の夏の山に、他では一寸ないと思われるいいところがあるのを知って、いいと思った。いやな所もあるがそれと相殺してもまだいい所が残る。だから私は二夏^{ふたなつ}北海道へ行ったのだ。私ばここで北海道の夏の山に肩をもつために、このつまらない紀行を書くことにした。

二

十勝^{とからしかりべつ}の然別川と音更川^{おとふけ}（いずれも十勝の支流）の水上の谷谷を私は大正十二年の夏に約十日間ほど歩き廻って来た。北海道の夏の山のことをおもうと、いつも私は自分の経験したわずかのなかで、ある山頂から望んだひとつの展望と、ある深林のなかをこそそこそと潜り流れてゆくひとつの小さな水脈に沿うてのさまよい歩きとに対する興味深き印象の上にのみがえらされる。それらのものとは嘗て過ぐる年の夏に、あの大河、石狩の水源をしてそこに発せしむるという石狩岳の秘奥なる頂からして、その直下はるかに拡がれる、森林は鬱蒼

として重厚に地を蔽い、谷々は陰暗にして深い音更川水上の流域を形づくる曠茫とした大盆地を瞰下した展望と、石狩川の水上をなす一側流ユーニシカリの流れに従いつつ、その広やかな流域を蔽う巨樹鬱々たる大森林を通ったときのことである。そして私はそのうち人煙を隔ること遠く、谷々のみな峡谷をなして深奥であるといわれているこの音更の水上に対してはいつかまた機会があったならば、その谷々の流を深くさかのぼっては、あの盆地の暗鬱な、そして広大な原始林のなかをきままな態度でさまよい歩いてみたいと思っていた。

去年（大正十二年）の夏の始め、いつかも一緒に石狩岳へ行ったことのある田中三晴君が十勝の然別川を遡ってニペソツより石狩岳への尾根伝いをして、音更に下る行程を辿るといふ計画をして岡本信三君とやると言うので、私は他に大賀道昌君、相馬康平君と共にその行に加えて貰った。ところがまだ別に記録もないし、地形図も全部ないうえに、地図のうえでの計画が当はずれをし、土地のアイヌから聞いた話が少しちがっていたため、予定の計画はとることが出来ず、山らしい山の頂上は殆んど踏むことが出来なかった。ただ谷を歩いたり湖辺で遊んで、最後に十勝平野の北の端にある、平野を一望のうちに占め得るような素敵に大きな展望をもった西ヌブカウシヌブリという千二百余メートルぐらいの山に登ったきりであった。だから山登りとしては駄目だったが、私はこのことにはあまり失望しなかった。ただオトプケの上流

がそんなに深くまたひどいものではないのと、ニペソツの山稜が石狩岳の頂上から見たときのように峻い岩稜でないのには意外に感じただけだった。

北海道の夏の山で私のいいとおもっている点は、まずその原始の匂いの多分にするような深い森林のなかをさまよい歩くことと、北海道の夏の山では常に自然の路であるところの川歩き——それもゆるやかにうねっては流れている浅い沢をピチャピチャと徒渉し歩くことである。それから荒々しい未開の自然のなかへ一歩一歩とはいってゆく人間生活の努力と自然との密接な暗示の働きがまざまざと親しく眺められるようなその開墾地特有な風景である。そしてなお、もうひとつには山へはいると殆んど人には会わないことである。人の歩いた跡さえも稀なことである。そんな点では、私はこの山歩きにそんなに失望はしなかったのである。私はこの紀行を一部はあまり登山者として記録のないこいらの様子やトボグラフィのために、他の一部は単なる自分のこの山歩きのあいだの印象や旅想ともいいつべきものとして書いたつもりである。

三

この山歩きの日時と行程の概要はほぼ次のようなものであった。（陸地測量部の地形図、然別沼、ニペソツ山、芽登温泉、芽登の四図幅を参照せらるればよくトボグラフィの点はわかる。）

七月十四日

旭川を早朝出る汽車に乗って富良野の平野を過ぎ、狩勝峠を越えて十勝の新得駅に正午頃着いた。汽車から下りてそこで一時半許いろいろな買物などしてから、十勝平野の北の山の裾で、然別川の丘陵の間にある売幕（ほんとに云うとウリマツクというのだそうだ）という開墾村まで屈足村を過ぎ十勝川を渡って丘陵の上の柏の林の間につづく直線路の約総計五里ほどをひどい雨にうち濡れて歩いた。午後六時半に売幕についてその駅通に泊った。（陸測地形図、新得、然別沼参照、但し地図にない新道路を行った）売幕の駅通では米味噌草鞋其他の物資をととのえることが出来る。

七月十五日

いろいろの荷分けや人夫を一人頼むために出発が遅れて売幕を正午過ぎに出発して、然別川の狭い丘と丘の間を河成平原を山でつぎるまで約二里北に開墾道路を歩いて、オソウシユ川が然別川にはいるところから急に両側に山がせまって暗い深林の中に路がついていた。この路は以前の伐材事業をやったときのと然別温泉へゆく微かな路とがいき交わっているのだが、中途からは甚だ不分明となっている廃道だ。土地のものが一緒に行つてさえよく分らないような程度だ。然別沼から出てくるトーマベツと地形図然別沼図幅の上で、トーマベツのうえの最初の沢即ちヌプリパタシユベツとの間は、地形図上にも一カ所大きなガレが記されているが、其他大小三カ所もガレがあつて路も歩き悪かつた。川を右岸に渡

つたり左岸にこえたりして漸く地形図上の「関造材事務所」という地点に達したのは午後六時半であつた。その夜はその廃屋に泊つた。終日小雨が降つたり晴れたりしていた。

七月十六日

この日は終日シーシカリベツを遡行した。初めはシーシカリベツがすぐ上で「ガンケ」になつていて通れないというところなので、地形図上の然別温泉にゆく小径をさがしてゆくと、その小径は温泉よりくる小沢に当つたのでそこに荷を置いて、温泉を見に訪れてみると、意外にも人がいた。それが温泉の持主の老人夫婦二人と湯治に来ているアイヌの親子二人とが居た。温泉は大したことはないが、こんな山中に人が居て経営しているのが不思議だつた。暫くしてそこから以前の荷を置いたところにかえつて、今度はその小沢をユーヤンベツにまで下つた。ユーヤンベツはウベサンケヌプリの下の方からでてくる大きなゆるやかな沢である。ユーヤンベツを下つて漸くシーシカリベツに合してからは全く一途に遡行した。シーシカリベツは川のなかを歩いてゆくのに甚だ石が滑つたり、倒木が川のなかにころがって歩いて歩きにくい川のようにだつた。そして感じの暗い川だつた。ユーヤンベツより上流へ二つ目の二段の地点迄遡つたら日暮になつたので、その川べりの深林の中に露営した。この日は終日曇つていて時々小雨があつた。里程にしては一里半ぐらいいしか歩いていなかった。

七月十七日

シーシカリペツを、露營地の上の二股は右へ、更に上流の

二股を右へと廻行して水の尽くるまでさかのぼると、それから上は可成りのヤブが針葉樹の間に生えていて方向を定めるのに困難した。一箇所非常に大きな雪崩の痕があつて、樹の根こぎにされたものや泥と雪とのまじっている汚ないデブリが小山のように積み重っているところがあった。私らの目的としていた山稜の鞍部と云うのはウベベサンケとニペソツの尾根の一六四六メートルの独立標高点のある間にある最低鞍部約一四〇〇メートルのところだった。非常に苦しいヤブの急斜面をのぼって目的の鞍部についたのは正午近くだった。そこからは石狩岳、ニペソツ、ウベベサンケ、及びホロカオトブケの流域がよく展望された。然しニペソツへつづく尾根は偃松^{はまつ}とヤブばかりで殆んど歩けそうもないうえに、残雪がみあたらない。このために私らの計画であつた尾根を伝つてニペソツから石狩岳までゆくことは駄目になつてしまつた。尤も初めから石狩までゆくにはあまり尾根の上に高低がありすぎるとは思つていた。然し先年石狩岳の頂上からニペソツの尾根をみたときは鋭い岩稜だったのに、こつちからみたときそれと余りちがいが甚だしいのには一驚した。そこで計画をかえて、ニペソツだけに登ることにして尾根をゆくことはよして、一度ホロカオトブケに下り、更にその本流がニペソツの下から出ているので、それについてニペソツに登ることとした。この時分より売暮^{うりぐれ}から伴れて来た人夫が非常に身体の調子を悪くした。鞍部から真北に下つて、三時半

頃わずかに水のある地点に来たのでそこで野営した。

七月十八日

人夫の病気がひどくなつて歩けないので、一日滞在して少しよくなるのを待つことにした。野営地は残雪のとけたすぐ後だったのでヌカ蚊がたくさんいて辛かった。終日いい天気だった。

七月十九日

野営地を早朝出発してホロカオトブケを下つてゆくと、九〇〇メートルの所で左から潤沢が入り、更に七四〇メートルのところからも左に沢がひとつ入つて、その下にはタキがあった。沢は歩きいい方だった。ホロカオトブケの本流との二股についたのは午前十時だった。そこにはアイヌの古い小屋掛けの痕があつて野営にはいい場所だった。病氣の人夫をひとり、食料と共にそこに残して置いて、私らはニペソツを登るためにその二股から本流を遡つて行つた。地形図を頼りにニペソツの下より出る源流へとのぼるうち雨となつたので、一一六〇メートル付近の二股を左にとつて少し遡つた地点のガンビの林のなかに野営した。夜に大雨となつて大きな焚火も消える程だった。

七月二十日

夜中の大雨のため、翌朝は用意がおくれ、天候は雨は降らないが、霧が深い。食料の関係で翌日を待てないので相談の結果ニペソツを登るのをやめて下ることにした。正午には以前の人夫を残して置いた二股に着いて、全部でホロカオトブ

ケを下り、地形図に出ている箱状のタキのある地点をすぎ、夕刻ホロカオトブケの幅広い礫の砂洲の上にテントを張った。ホロカオトブケは非常に歩きいい、そして美しい川だった。

七月二十一日

朝一時間ばかりホロカオトブケを下るとオトブケの本流と合した。そこへ来たとき、本流から下ってきたイワナ釣りに出会った。話を聞くと北大の藤江君一行と上流へ行つて昨日の正午に別れて下つて来たのだと言っていた。一緒に本流を下つて行った。メトセツに十時半頃ついた。本流は川幅が広くてどこを歩いていいかわからないが、大体右岸を行つた。地形図に出ている開造材の伐木道をさがしてそれについて下つてゆくと道はだんだんよくなつて行つた。綺麗な白樺の純林などがあつたりして、午後四時二十分にヌカビラについた。私は然別沼へ行くのに、このヌカビラを遡つてヤンベツに下り、そうして沼へ出ようと思つていたのだったが、例のイワナ釣りが、それよりも内待川をのぼつてヤンベツにゆく道があつて、その方が楽だし、ヌカビラは仲々悪くて容易にのぼれるものではないと教えて呉れたので、内待川を遡ることにした。そして元小屋まで下つてその清水沢駅通に泊つた。

七月二十二日

清水沢駅通より音更川の細長い河成平原の開墾地を下つて、奥上土幌の村を過ぎ東三線四十五号の地点で音更の本流

を渉つてから、然別山塊の高みへと内待川に沿うた道を登つて、その日は地形図の上に出ている本名造材事務所に泊めて貰つた。

七月二十三日

造材事務所から上流は径はほんの足痕ぐらいが残っているばかりであつたが、それに導かれて、最初の二股は右へその次の二股を左にとつて遡つてゆくと水がつきて針葉樹のなだらかな分水嶺に達した。それを地形図を頼りに西北にとつてゆくと自然と径はヤンベツの一流流へと下りて行つた。そしてそのゆるやかな流れを下ると本流に合し、更に行くと右よりまた一つの緩流が入つていた。それからヤンベツはますます緩かに紆り流れて、分流がいくつも生じていたのが紛れやすかつた。然し然別沼の水辺に達して、そのヤンベツが沼にはいる入口にあつたアイヌの魚釣りの小屋と云うのにその日は泊ることにした。

七月二十四日

魚釣りの小屋を出発して沼の左岸に道庁がつけた測量の切明を辿つてゆくと、地形図上で右の沼の入り込んだ処の、岸辺の平な場所に道庁の林務課の測量テントがあつた。そこから丸木舟に乗つて丁度対岸に今年から開いたと云う然別温泉へ舟を借りに行つて、その舟でトーマベツの入口まで乗つて行つた。そこには一つ的小屋があつた。そしてそこから地形図上の小径を登つて、東西ヌブカウシヌブリの間の「見晴峠」と俗に云っている峠に達して、峠の上から直ちに西ヌブカウ

シヌブリの頂上へ登った。頂上については午後三時二十分で、そこより円い草原の尾根を少し下って千二百三十メートルの高さの頂上については三時五十分だった。そこは非常に展望がよく、十勝平野から右手、背後の山々まですっかり見えるので、長い間休んで四時三十五分にそこを出発した。そこよりは草地の斜面を地形図の小径まで一直線にかけ下りた。そして丘陵地をすぎ、売暮村の駅通については七時十分だった。

七月二十五日

売暮より新得まで歩き、その日の午後の汽車に乗った。そして北見の方へ行った。

人夫としては先年石狩岳へ行ったとき行を共にした成田嘉助と高橋浅市の二人に、売暮で若い人夫をひとりたのんだ。一行は田中三晴、岡本信三、相馬康平、大賀道昌の諸君と私とであった。ニベソツの付近は測量部の地形図があったので、私たちは安心して地図を頼りに歩けたのだった。

四

私は十勝の大きな平原がだんだんと西北をしきっている山の方に近づくに従って、低い丘陵の波をばゆるやかにうねらしている辺りの開墾地の殺風景だが、そのなかに一味の新鮮さと寂しさを、しっとりさせたようなベイスージュをまたなくいいと感じた。売暮や音更おとふけの村があるあたりは特にいいと思った。そこいらは緑の草一面の、まるで夢の様ななら

かな線をうねらして丘が丘とつづいていた。そうして其うえには柏の林と白いガンビの粗らかな木立とが、まるで緑の冠のようにしずかない点景をつくっていた。真四角に黒々と土の鋤きおこされた開墾地がその丘つづきのあいだの低いところに際立ってみえて、その内部生活の悲惨さをばまざまと私らに思い浮べさせるような開墾者の貧しい住家がそのまんなかに佗しげな生活の水溜りをつくっていた。その住家——それは節の多い木材と薄い壁土とで急造されたバラック小屋よりももっとみすばらしく、汚れくさったものだった。そうしてそこいらは北海道には相変らずの直線的な幅の不釣合に広い道路が、丘や流を真一文字に突切るようにして通じていた。ここいらあたりのこのような風景と、それからここいらあたりに住んで開墾をしている人たちの生活光景とは、互に相似通つてるように私にはおもえた。いろいろとみたりきいたりしたところでは、ここいらの開墾者はそのまわりをとりまく原野の景色とおなじように殺風景な、光明に乏しく不安に沈溺した、全く根柢のない流浪の生活をしているらしかった。その人たちはみな眼前の小利のためやまたはより大きな外部よりの不正な強圧のために、徒に自らの墾いた耕地を棄て、或いは働くべき土地を奪われ、不当に搾取されては、憂鬱を顔にし、貧窮を背後に背負ってこの曠野に流浪しているのだ。「大地を生命とするものの幸福」などという詩人のいっているような幻想的な美しい幸福さのひとつかけらだってそれらの人たちの生活の内部にはみあたらないであろう。私は、

一個の通りすがりの旅行者としての私はこれらの開墾者の生活をおもつてみて、これらのことは悲しむべきことか憤るべきことかは知らない。けれどただそこに何等かの不満と不正とを私は感ずる。そしてこれらの事実を如何ともなし得ないこの現代の社会組織の欠陥を私は感ずる。人は旅にでるとつまらないことにでも感じやすくなるものだ。鋭い感受性の所有者となるものだ。私はこの広大な曠野のなかに於てさえ働くべき耕地をもち得ない貧窮な開墾地の労働者のことなどをきいたとき、そんなことを深く感じたのだった。あとで思い返えてみると少し馬鹿らしくもなるが。新得から売幕までは五里ほどあつて、十勝川と然別川しかりべつをわたっているが、そのあいだの丘のうえを地図にない新しい道路がわずかに二つか三つぐらいの屈曲をしただけぐらゐに直線的に約三里ほどつづいてゐた。それは雨のぼうぼうと降つてゐた日だったけれどそのあいだで私たちは人ひとりに出会わなかつた。道路の両側は全く柏かしわの林ばかりで、そのなかをいたずらに、全くいたずらとしか思えないほどに幅の広い、立派な、生新しい道路が通じてゐた。どんなにこの原野や丘のうえの風景が、北海道をはじめての内地からの旅行者の眼にめずらしいものであるとしても、この直線一点張りの道路にはあきてしまうだろうと、おもう人もあるかも知れないが、私はそうは感じなかつた。ほんとにこんなような道路の一直線にあつては、どんな辛棒しんぼうつよい旅行者でもあきあきとさせられてしまうものだろうか。これらの道路は全く単調だかも知れない。無趣味な路

かも知れない。けれど、私はそれらの道路はよく両側の風景とコントラストしてゐると思つた。取り残されてほうほうと立つ貧しげな焼木立やけこだちの黒々と殺風景に点在してゐる荒蕪こうぶの原野をつらぬいてまっすぐに幅広く立派につづいてゐるその路は、何んという不自然のような自然な路だろう。私にはこんなような北海道の開墾地の直線路は好ましいものだ。何里歩いたつて、幾日歩いたつていいと思う。それでも、若しも私が退屈することがあつたら、そしてまた若しも私がひとりで寂しいのだつたら、そのときには私は、あのひとり旅ゆくものゝ幸福な飽しさをうたつたというアイヘンドルフのライゼリートや、あるいは、私はあの空の星のようにひとりぼっちだけれど、私は路の主人だ、日光も風も私の友達だ、という古いシユワープのワンダーリートを歌つてやろうとおもつてゐる。もしも用事かなにかのためにこんな路を歩くのだつたらそれはつらいだろう。退屈だろう。まどろっこしいだろう。けれど、名所をたずねるのでもなく、歴史を求めるのでもなく、ただ旅行のために旅行するような旅行者は、こんな路上にあつてこそはじめて自分自身をほんとに解きほぐすことが出来るのじゃないかと思う。いったい人はその自由な四肢と精神の解放される旅というものを古くから愛してゐたといふことだ。まったく路を歩いていつもおのれを解放してゐるのは、ただ古くから旅をしてゐるものだけだ。旅では歩くことが歩くことをたのしませるのだ。ましてこんな路ではそうかも知れない。そういう時に路ははじめてほんとのものを知